

# 幼児教育・初等教育における 農業体験学習カリキュラムの検討

佐藤 登\*・池上 敏\*\*・石川正一\*\*\*・白水完治\*・阿濱茂樹\*\*・徳永高男\*\*

The Study of Farming Practices Curriculum  
in Preschool Education and Primary Schools Education

SATO Noboru\* & IKEGAMI Satoshi\*\* & ISHIKAWA Syoichi\*\*\* &  
SHIRAMIZU Kanji\* & AHAMA Shigeki\*\* & TOKUNAGA Takao\*\*

(Received September 28, 2006)

## 1. はじめに

私たち人間は農業生産を行うことによって今日まで生きてきた。産業革命によって工業化が進み人間の生活に大きな潤いをもたらした。しかし、現在地球上に60億人の人間が生きていくための食料は、不足していると指摘され、実際に食糧を十分に食べている人から飢餓の状態の人まで様々な状況がみられる。我が国では旧来から食糧生産に力を入れてきたが、最近では自給率が39%と先進国では最低であり問題視されている現状である。しかし、それは社会を構成する大人から発生した問題であって子どもたちには理解しにくいことであると考えられる。日本では自分たちの周辺には食べ物が過剰な位に満ち溢れ、自分が努力しなくても何時も目の前に準備されているならばそれが当たり前と思うのは当然であり自給率の低いのがなぜ問題なのかは分らないと考えられる。

小学校では、人間として生きていくための様々な事象の基礎・基本を学ぶ機会を設けてあるが、農業に関する体験学習が欠けていることは問題であると考えられる。この農業に関する体験学習には、今自分たちが生きていく意味を本気で探る機会が豊富に存在していると思われる。農業に関する体験学習としての時間を別枠に増やすのではなく各教科に含まれている農業に関わる内容を総合的に纏める、また特に低学年で具体的な事物を通して理解していく時に、農業が身近なものとして受け止められるような題材を選択することが考えられる。具体的には、算数の1、2年生で、指導要領の目標に「具体物を用いた活動を通して・・・」とあるが実際の農業の中には人間が生きていく為に必要なそして有用なことが多くあり、どれを選んでもそれを通して理解が深まると考えられる。

本稿では、上述の考えのもとに幼児教育・初等教育における農業体験学習の指導実践を踏まえ、農業体験学習のカリキュラムを検討する。

## 2. 農業に関する学習指導

### 2.1 食の安全に関する内容

---

\* 山口大学教育学部非常勤講師    \*\* 山口大学教育学部    \*\*\* 山口福祉文化大学

少し前までは食べ物に関して、その内容が本物かどうかを問う問題になることはなかったと思われる。農業技術の進化とともに、便利になり豊かな食生活を送れるようになった現代で、食べ物は安心・安全に関する報道が多くなり、食への信頼が揺らぐ現状になっている。あらゆるものが金額で計られ、自然も数値で表さないと理解できないような状態になっており、食べ物を作る人と食べる人の顔が見える関係でなくなっていくと信頼関係までも薄くなっていくというのは、まだ私たち人間が考えなければならないことが山積していると考えられる。自分たちで動物を飼ったり、植物を育てたりするという活動を通して、生き物同士として相手を見つめる機会を増やす重要性が高まっていると思われる。

近年の教育行政の指針で、食べ物に関する活動が「食育」というキーワードで取組まれているが、自分たちが食べる物について直接触れる機会であり自然環境について考えてみる視点も欠かすことができない学習であると考えられる。

## 2. 2 学年を通して出てくる農業や生き物に関わる学習系統

学年毎に学ぶ内容が互いに関連しあって自分の中に一つの考えが形成されるとするならば、自然や環境の影響を受ける生物生産に関わる学習は、暦に沿った内容で行われるべきであると考えられる。また、人間は農業を今まで続けてくることによってただ生きるだけでなく、自然の影響を受けながら文明、文化を創り出していることに気づく工夫をするべきであると思われる。

## 2. 3 地域に根差した農業文化に関わる学習

また、地域に根差した文化、伝統を通して農村で行われてきた生産活動を体験することにより、風土や環境、文化に密接に関連した農業活動の実態をすることができると思われる。生物の本来あるべき姿を実際に接することにより食文化を中心にした生活文化の理解が深まると考えられる。

## 3. 初等科生活における「お田植え音頭」創作を中心にした授業プランとその展開

山口大学教育学部における初等科生活は、過去十数年にわたり受講者全員に田植えの実習を課してきた。その中で、何回かではあるが、学生自身が自ら作った「お田植え音頭」を田の神に奉納し豊作を祈る、という「民俗信仰的な予祝行動」を経験させる事が「生活科の田植え」の全体的な意義を理解させる上に有効であろう、という予想で一部の学生グループに「創作・お田植え音頭の制作と発表」を課してみた。以下、その概要を報告すると共に、今後の授業展開について考察する。

初等科生活における「お田植え音頭」の制作を発表は、前述のように一部の学生に対し、実施可能と思われる年度に限って実施したものである。回数は十数年の間に数回、最初の内は三年程続けて実施したが、その後は飛び飛びとなり、今年度（07年）久々に実施出来た、という状況である。

当初、初等科生活は受講生総計二百数十名を、1コース当たり数十（50～60）名、栽培、飼育、人形影絵、野外活動という4つの領域に学生を振り分けて実施した。発足初年度はともかく無事に一期・半年分の授業をこなすのが第一の目標であり、とても「学生達に対して面白く、かつ何らかの意味で有益な体験」をさせる授業プランを考え、実施してみる、という段階まで至らなかったというのが本当である。二年目の授業に対しては各教員が初年度実施の経験を踏

まえ、様々なアイデアを出し合った中にこの「創作・お田植え音頭」の制作を組み込んでみてはどうか、というものがあつた。大きな無理をせずに実施可能なプランを検討した結果は以下のようなものであつた。

- ・四つのコース中で田植えに直接関係するのは栽培と野外活動のコースであるが、どのコースに主導的な役割を担ってもらうのが適当か、と考えると野外活動コースであろう。
- ・学生達の現時点での経験や能力を考慮すると、簡単に概要を説明しただけであとは完全に学生達にお任せ、というようなおおまかな授業プランでは学生の負担が大きく、かつ授業者が期待するような成果は得られない可能性が高い。教員側からの何らかの支援が必要な場面が出現する場合には教員が指導することも考慮するべきだろう。
- ・歌詞の創作は高等学校までの国語科の学習内容・程度で対応出来るだろう。「五七調」または「七五調」での言葉選びを示唆する。
- ・「お田植え音頭」を日本的な情緒を感じさせるような楽曲に仕上げさせるためには、作曲法の基礎を教える事は必須。日本的な五音音階、童歌の音階構造などを学習させるための「授業」を組み込む。
- ・1コース全体で一つの楽曲なり踊りなりを構想させるのは場所的な問題や、学生の所属、履修時間割りなどを考えると無理がある。学生達に4グループ程度の自主的な集団を組ませ、必ずどこかの集団に所属するように指導する。
- ・出来上がった各グループの「お田植え音頭」を受講者全体の前で披露し、全員が踊れるものを選び、全員に練習させ、田植え当日に農場で「奉納」する。

このように実施した結果、学生達がどの程度田植えやお田植え音頭の授業意図を理解したのか、をレポートを提出させて検証した。結果、「田植えに関わる民俗的な予祝行事」としての「田植え音頭の踊り、及び奏楽による奉納」の意義を完全に理解したとは言い難いが、田植えを授業に組み込んだ意義は大部分の参加者が納得してくれたようである。お田植え音頭に対しては野外学習コースのレポートに「どのような意味があるのか、いまいち解らなかったが、お田植え音頭そのものの創作は結構楽しかった。」という内容の記述が多く見られ、学習内容や設定の意図を完全に理解してくれた訳ではないが、理解のきっかけにするという程度には成果があつた事が確認できた。

その後、三年間程実施したが、特に印象に残つた例は幼稚園教員養成課程（当時）の学生十数名が授業時間割りが同一で、相談や練習の時間が統一的に取れる、という理由で編成したグループのもので、この集団は自分達で作詞・作曲・演奏した「お田植え音頭」をカセット・テープに録音、振りも自分達で工夫し、そろいの衣装を手作りで作製し披露した、という本格的なもので、これは教室全体に集まつた学生達から絶賛の拍手を浴びた。ただし、自分達も踊る、という条件での選択から、この作品が受講者全員が踊る作品にならなかつた、というのはいへん惜しかつた。この年は創作・お田植え音頭4作品総てを、田植え当日に奉納したように記憶する。



図1 お田植え音頭の様子

その後、初等科生活では授業編成の方針変更が二度ほどあり、各コース、あるいはクラスでの授業内容の変更、担当教員の入れ替え等の理由で数年間実施してこなかったが、平成19年度前期の初等科生活の「生活科から総合的な学習へ」クラスで「創作・お田植え音頭」の制作を課してみた。受講者は全二十数名、学生の負担を考慮し、全員で一つの「創作・お田植え音頭」を作らせる、という程度にとどめた。この制作には3週を当て、各週の授業、及び指導の概要は以下のようなものとした。

- ・第1週、歌詞の作製。短めの歌詞を三番まで（春、夏、秋）考えさせる。「さ」が冒頭に付く大和言葉が多くは神聖な意味を持っていたことを教え、いろいろな「さ」の付く言葉を捜させる。同時に、「五七調、七五調」を教え、言葉の調子を整えさせる。
- ・第2週、曲付け。音楽理論の講義（五音音階と日本の音楽の構造的な特徴などの説明）は簡単に行ったが、実際の曲付けは音楽教育選攻の学生が担当した。
- ・第3週、振り付け。音楽教育の学生が作曲したものを発表させ、それを基に各節の振りを2グループに分けられて付けさせる、という作業。

学生達はそれなりにこなした、という感触は持つが、示唆を与え、指示をしておけば学生達が自主的に何かを作る、何かをする、という事は極めて期待しにくい、というのがここ十数年での大きな変化だろう。学生達の基礎的な学力（勿論従来の意味で、と限定しなくてはならないだろうが・・・）、あるいは行動力、思考力は明らかに下降して来ている。今一番求められているのは、学生自身が「実は自分の能力と思っていたものが、多くの支援によって形になっている。」という実感を持ってもらう事なのではないだろうか。

今後、このような授業を展開出来るかどうか、はっきりしない状況になりつつあるが、相当にユニークな授業内容ではないか、と思われるので、継続を模索して行きたい。

#### 4. 幼稚園で米作りを取り入れた実践について

幼稚園での農業体験学習（幼稚園の場合は「農業体験保育」とするのがふさわしいと考えるが本小論では全体の統一をはるために学習という言葉を使う。）の意義をとらえるには、十分

なケース等の検証が必要であると思われるが、ここではかつて山口市宮野に所在していた山口女子大学附属幼稚園（1949年～1996年3月）（以下、附属幼稚園）が1992年から4年間取り組んだ米作りの実践を紹介しながら農業体験学習をどのような理念としてとらえ、実践したかについて述べる。

附属幼稚園で米作りをするにあたって、最初の具体的な活動は限られたスペースの中で田圃を作ることから検討を始めた。

そもそも田圃の土壌を一日にして作ることは不可能であり、長い年月それも数十年を経て作られている現実を知り、土壌と米作りの関係の中から教育的な意義も考えることとなった。田圃の土壌は籾殻や藁、それに周囲の畦草など様々な有機物が長い年月の中で分解されてきた土であり、砂礫と攪拌しながら何層にも重なって作られている。また、攪拌され、沈殿した最も細かい土壌層は、水田の水を止めて乾燥させる時、収縮し地割れを起こす。それとともに稲の根を切り、そこに新たな水を流すことによって新しい根を伸ばし、稲は新たに水を吸い上げる力を得るといふ。田圃に地割れが起こる時、根の切れる「バリッ バリッ」という音が聞けるという。長い年月の中で長い時間と人間の絶え間ない努力が作り上げた、まさに田圃は英知の固まりである。農業は英語で Agriculture といい、agri とはギリシャ語で大地を意味する。大地の文化そのものが農業であり、田圃は土壌の文化が凝縮されている所である。近年は田圃が単純に埋められて家が建つ時代であり、田圃の土壌が長い年月によって作られ、多くの人々の命を支えてきたことを考えると残念でならない。

そして、幼児期の豊かな感性を有する時代に全身をとおして、この土壌の文化を体験させることに、農業体験学習の意味があると考えている。単に米を作り食べるだけでなく、田んぼのぬるぬるした土壌、黒くどっしりした感覚とそこに育つしなやかな稲、黄金色に実る稲穂、そして、稲は藁、籾、玄米としてそれぞれ人間の衣食住にまで役割を果たすことができる。稲という植物が人間にもたらしてくれる豊かさは計り知れない。そして稲の命は種籾として次の時代につないでいく。我々はそうして稲との共存によって日本の文化もまた創造してきたはずである。稲の大切さは土壌と共に生きてきた人間であれば、誰でも容易に理解できる。しかし、近年我々は自然とともに生活するすべを失いつつあるように思われる。幼稚園の環境にもそのことが見受けられる。例えば、幼稚園の物的環境を左右することに、安全に対する考え方がある。安全は自然の法則を学ぶことで理解できると考えるが、また自然を排除する一面もある。その結果、園庭には草も生えず、石も無いような環境が生じる。その結果子どもたちの中には土壌が汚いものと理解する傾向は増加しているようにも思われる。科学的な論述では無いが、土壌は死を受け止め生を生み出す場であり、生命の根源を支えている場である。そして人類はこの土壌と共に生きてきたといっても過言ではない。こうした土壌の文化と人間との共生の重要性をいかにして教育の中で位置づけ、意図的に取り入れていけばよいのか、山紫水明、豊かな自然を持つ我々の食糧自給率が40%を割った現在、食料としての農業だけでなく、農業の有する文化的側面の重要性も日本人にとって急務とする教育課題であると考えている。こうした現状を踏まえながら、幼児期の豊かな感性の中で、土壌に親しみ、土壌の豊かさを少しでも感じられる子ども達をどう教育すればよいのかを問いながら教育実践を行った。そして文頭に記した園庭に田圃を作ることから始まった。

まず、幼稚園では2坪ほどの土地を20cmほど掘り下げ、周囲の畦の部分盛り上げ、保水の役割をもたせるためにビニール製のシートを敷き、その中に保護者が所有する休耕田の田圃の土を分けていただいた。水は水道水を使用した。こうして2坪の田圃が完成した。米作りは一

年を通して園生活の一部として自然にとけ込むように配慮した。幼稚園はチャイムのない学校と言われるように、とぎれることのない生活そのものであり、時間の枠に縛られることのない活動が可能のために、小学校等とは異なり自然のペースで様々な活動を創造できたことは良かったのではないかと考える。また、米作りは新学期と共に始められることも活動として取り組みやすく、また、衣食住の様々なところで、稲藁文化が展開できることも出来、子ども達の日線に合った幅広い活動が取り組めた。

年間の主な活動の流れは表1としてまとめた。

米作りに挑戦した初年度は水田作りから始まったが、2年目から前年度に年長が行う田植え等の活動を見ており、米作りは周辺の農家の動きと同調しながら子ども達の期待をふくらませていくことができ、幼稚園の生活の一部として自然に子ども達から米作りへの意欲は高まった。4月は園児が見守る中で田おこしを教員が行った。僅か2坪でも、園児にとってはかなり大きな田んぼのイメージであり、大量なお米が収穫出来るような言動が目立った。籾蒔きは年少から年長まで全園児が取り組む活動として行った。塩水選を一通り体験しながら各自が持ち寄った牛乳パックに田圃の土を三分の一ほど入れ、さらに三分の二程度の所を3カ所水平に切り、蓋が出来るようにして、中に籾を蒔き家庭に持ち帰って育てた。最初は蓋をして育て次第に蓋を開けて育てる等の方法を保護者に伝達するが、3週間ほどして集めると成長にばらつきが生じた。中には枯らしてしまう家庭もあり、保護者が反省しきりの場面もある。そのような場面も想定し、幼稚園でもあらかじめバケツに種籾を育てておく。苗の成長は様々であるが、最終的な収穫にはそれほど影響しないのも体験して分かったことである。そして自分が育てた苗を植えることとなる。

植えた後は稲の生長と同時に水の管理や水田に来る動物の観察が始まる。不思議とカエルが集まって来て鳴き、オタマジャクシが生まれ、豊年エビなど土壌生物がどこからともなく見ることが出来る。毎日のように水田に変化があることも子ども達の興味や関心をそそる。また、園児の保護者や祖父母が送迎時に水の管理の仕方や稲の病気等について様々なアドバイスをし帰る。稲をテーマに様々なコミュニケーションが図かれ、豊かな知恵の文化に浸ることが出来る。当然、子どもたちも聞き入っている。稲の生長と共にいろいろ発見があるが、稲穂がたれるまで観察の日々は続く。水の管理は夏休みの間も続き、当番制で園児と保護者で行った。

表1 米作りかかわる年間活動

月	主な活動
4	田おこし 粃蒔き（全園児が塩水選を体験し、土を入れた牛乳パックに蒔いて育てる）
5	田植え 面積が少ないため年長児が担当
6	草取り、水の管理、稲の観察、生き物の観察
7	草取り、水の管理、稲の観察、生き物の観察
8	草取り、水の管理（夏休みも当番で行う）、稲の観察、生き物の観察
9	草取り、水の管理、稲の観察、生き物の観察案山子を作る
10	稲刈り、はぜかけにする 割り箸で脱穀をする、種粃を保管する すり鉢で粃摺りをする 一升瓶に玄米を入れ、棒で突きながら精米する
11	一升瓶に玄米を入れ、細い竹で突きながら精米する 新米を食べる会を開催（保護者と全園児参加） 獲れた新米を羽釜で炊いておにぎりを作り、食べる 藁を編んで藁の座布団を作り、それに座って食べる
12	縄を編んで縄跳びを作って遊ぶ
1	すくもで野焼きをする（すくもは近くの農家から分けてもらう）
2	すくもの灰を田に入れる
3	堆肥を入れる

そして稲穂が膨らむ9月頃、案山子も立て、運動会の頃稲刈りが行われる。刈った稲は幼稚園のフェンスに掛けられ、はぜかけ米にする。稲刈りの日は園児や保護者等みんなの意見を聞きながら決める。稲の刈り方は園児の祖父母にお願いし、いろいろな注意をしていただきながら行う。稲穂は手で摘み、割り箸の間を通して脱穀を行う。粃摺りはすり鉢で行った。その後は獲れた米を一升瓶に入れ細い竹でひたすら突く。白米にするにはかなりの時間がかかり、時には家庭に持ち帰っていただき順番に精米することもあった。ほぼ一ヶ月程度をかけて白米を作り、11月23日の勤労感謝の頃「新米を食べる会」を開催する。これは保護者と全園児が参加する。収穫した米は羽釜を使って薪で炊く。全園時80余名に握り拳大のおにぎり2個程度が行き渡る。当然、参加者全員には少ないため、保護者から寄付していただいた新米も別の羽釜で炊いておく。また、保護者と一緒に藁を振り分けで編んで座布団にし、それに座って食べる。一瞬だが、誰の口からも「美味しい」という言葉が自然に出る。中には「うちの子は普段ほとんどお米を食べないのに、今日はおにぎりを3つも食べました」と驚く保護者もいる。誰もが美味しいと言う食事に出会えるのも貴重な体験であるとともに、米作りの共通体験が自然に参加者を饒舌にする。

その後、残った藁で縄跳びを編んだり、粃殻で園児の粘土作品を野焼きしたりして最後は全て2坪の田んぼに入れて一年間の活動は終了する。

このような活動は、いくつかの点において評価できるものと考えている。

1) いろいろな人々とのコミュニケーションが広がり、様々な知恵が生きる場面にたくさん遭

遇することが出来た

- 2) また、自然との生活に欠かせない時間の連続性のある生活が体験できた
- 3) 2坪の水田に様々な動植物がかかわっていることが体験できた
- 4) 粃が再び粃を作る場面を体験でき、藁が縄跳びになり、粃で野焼きができた
- 5) そして灰も田んぼに入れ、完全にサイクルしている自然の姿が体験できる  
などが上げられる。

こうしたことを通して、教師の立場からすれば、子ども達の中に土壌の豊かさや稲や米に対する様々な感性を抱き、古代から日本人が大切にしてきた稲作文化を楽しみ原風景として心に残して欲しいという願いがある。それは、遅々とした自然の歩み、されど着実な歩みの中で我々の命を支えてくれる食料を土壌が育み、文化を育てていることに気づいて欲しいという願いである。農業体験学習はこうした人間の根源に迫る教育の機会を豊かにもっていると考えられる。

## 5. まとめ

本稿では、幼児教育および初等教育の中で農業体験を通して文化や伝統、生活技術を学習するためのカリキュラム検討を試み、具体的な実践事例の整理を行った。

幼児教育から初等教育をとおした具体的なカリキュラムの提案までは至らなかったが、各段階における農業体験学習を系統的に行うための知見は得られたと考えられる。

今後は、これらの実践事例を踏まえて幼児教育から中等教育までの農業体験学習のための学習内容の検討とカリキュラム開発が課題であると思われる。